

京都を中心に活動する

アコースティックデュオ

ふらっととら

67歳の詩30代が曲に

当事者でないとはなかなかわかりにくい介護の現実。それを介護経験のない30代の男性2人が歌い、静かな共感を広げている。親の介護に悩みながらも光を見出した年配の当事者から、「思いを歌に託された」編の詩。そこから曲が生まれた。11月11日は介護の日。

京都在住のヤマカタサトシ

さん(33)とほんさん(32)によるユニット「ふらっととら」。かつて歯科技工士と会社員だった2人が2009年に結成、アコースティックギターで美しいハーモニーを響かせる。

介護の曲を歌うようになったきっかけは昨年2月、京都市の地下街で開いたライブの後、年配の男性から突然、声をかけられたことだ。

「懐かしい気持ちを、歌ってくれるかな」

その男性は、中学校元教師の林政広さん(67)。定年前から9年近く、母親のおききさんを介護し、京都を拠点とする「男性介護者を支援する会」でも活動していた。友人から「ふらっととら」の評判を聞いてライブを訪ね、思い切

って申し出た。

ヤマカタさんとほんさんの2人は初め、びんごごなかつた。作詞作曲した曲が60代もあるが、ベースにあるのは自ら経験したり感じたりしたこ

とだった。

後日、林さんから自身の経験にもとづいた長文の時を手渡された。徐々に記憶がぼろぼろになる母と、それに向き合った日々がうつられていた。時に泣き、時にいらだちながらも、母からたくさん料理のレシピを教わり、同じように親と妻を介護する仲間にも出会えた。

林さんには強い思いがあった。「暗い悲しい経験として語られることの多い介護のイメージを変えた」

2人は考えた。「暗いはずはたなく、でも単に明るくすればいいというものでもない」。時間をかけて構成を練り、優しく親しみやすいテンポとメロディーを仕上げた。

完成した曲のタイトルは、「幸せの女神」。介護を受ける人はただ世話をされる存在ではなく大切な人を教えてくれる、という林さんの思いがこもった言葉だ。

あききさんは昨年末、97歳で世を去った。「ふらっととら」は全国各地のライブ会場でこの曲を歌い続けている。客席には涙する人も。

家族を介護中という年配の人たちからは「優しい気持ちになった」と言われ、若いファンからは「おぼあちゃんを思い出しました」と感想が寄せられる。介護の仕事をしている人からもよく声をかけられるようになった。

実は、ヤマカタさんには「当事者でもないのに何がわかるのか」と思われるこわさもあるという。「だからこそ林さんの言葉を大事にした」。ほんさんも「共感してもっているのがわかる。僕らにも伝えられることがあり」と話す。

今年、「幸せの女神」をメインにした3枚目のアルバムがリリースされた。問い合わせや、活動の詳細は「ふらっととら」@GHA (<http://kyoto-flat.tumblr.com/>)。

「介護の日」は、介護する側、される側の毎日が「いい日」だ、(いい日)「いい日」であるようにとの意味を込めて、厚生労働省が08年に決めた。

(十河聖子)

